

普濟寺版「五部大乘経」は「覆宋版」か(二)

― 本文と漢字字体からの検討 ―

佐々木 勇

(受理日二〇二三年十月六日)

〇、前稿要旨と本稿の目的および方法

1. 前稿の要旨

本稿の対象とする普濟寺版は、貞治二年(一三六三)以来約四十年間に亘って開版された。

本稿の筆者は、「普濟寺版「五部大乘経」は「覆宋版」か(一) ―書誌的事項からの検討―」(広島大学大学院人間社会科学研究所紀要「教育学研究」3号、二〇二二年十二月。https://doi.org/10.15027/53383。以下、前稿と呼ぶ)において、普濟寺版と宋版一切経思溪版および春日版とを比較し、普濟寺版について、左の諸点を指摘した。

① 普濟寺版が春日版と一致し、思溪版と一致しない項目

1. 装訂、2. 法量、3. 一板の行数、4. 版面の大きさ、5. 天地の界線

② 普濟寺版が思溪版と一致し、春日版と一致しない項目

6. 内題下の千字文

③ 普濟寺版が思溪版・春日版のいずれとも一致しない項目

7. 柱刻の位置、8. 柱刻の内容、9. 卷末刻板数、10. 卷末刊記、11. 刊記と柱刻の欠筆

②の「内題下の千字文」は、思溪版に依拠せずとも印刷可能である。したがって、普濟寺版は、宋版と春日版とでは、春日版に近い。

しかし、春日版とも一致しない項目②③が、少なからず存在する。よって、普濟寺版は、貞治年間に、日本武州において新たな「五部大乘経」を開版しようとしたものである。

2. 本稿の目的

本稿は、紙幅の都合で前稿で触れられなかった、普濟寺版巻頭の訳者名・品名と経本文ならびに卷末釈音における注文異同および本文の漢字字体について、宋版および春日版と比較することで、普濟寺版成立に関する考察を進めることを目的とする。

3. 本稿の対象文献と研究方法

思溪版・春日版・普濟寺版の依拠本は、前稿に等しい。

普濟寺版は、以下の諸本を調査した。

○摩訶般若波羅蜜経 全三十卷(東洋文庫・貴二一C一b一24一〇)。

○大方等大集経 全三十卷(立川普濟寺蔵本)、卷第二十九(阪本龍門文庫326番)。

○大乘大方等日藏経 全十卷(東洋文庫・貴二一C一b一11一〇)、卷第三(阪本龍門文庫325番)。

○大方等大集月藏経 全十卷(東洋文庫・貴二一C一b一15一〇)。

○大方広仏華嚴経 卷第一―第五(東洋文庫・貴二一C一b一13一〇)、卷第

六(大東急記念文庫1071)、卷第七(東アジア人文学情報学研究所センター)。

松本文庫282)、巻第十一(十五)大東急記念文庫1071)、巻第二(二)五(京都大学附属図書館・1-23/タ/10貴・登録番号174501)、巻第二(二)六(二八)三〇(大東急記念文庫1071)、巻第三(一)三七(四〇)(京都大学附属図書館・1-23/タ/10貴・登録番号174501)、巻第四十五(国文学研究資料館・貴98300)、巻第五十六(六十)(東洋文庫・貴2-C-13-10)。

原本閲覧させて頂いた玄武山普濟寺・東洋文庫・大東急記念文庫・阪本龍門文庫・京都大学附属図書館、画像公開して下さっている東アジア人文情報学研究センター・京都大学附属図書館・国文学研究資料館、原本閲覧のお世話を頂いた玄武山普濟寺・弓場重典御住職、立川市歴史民俗資料館・浦島利浩氏、並びに諸機関閲覧担当の皆様に、改めて、心よりの御礼を申し上げます。

本稿の対象とする普濟寺版は、右調査文献のうち、後世の補写巻(『摩訶般若波羅蜜經』巻第二十一(三十)、『大方等大集經』巻第十四(十五)十七(二十)、『大方広華嚴經』巻第三十二)を除くすべてである。

前稿では、思溪版と春日版との相違点について、普濟寺版における実態を見た。本稿でもこの方法を引き継ぐとともに、思溪版・春日版に見られない普濟寺版特有の事項についても指摘する。

一、分巻法

現存する普濟寺版のうち、『大方広華嚴經』は、宋版一切経内で分巻法が異なる。

佐々木勇「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切経(一)―刻記の比較による検討―」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発 関連領域)64号、二〇一五年十二月)の注(12)に記したとおり、仏陀羅等譯『大方広華嚴經』(旧訳・古華嚴)を、東禪寺版・開元寺版は五十巻、思溪版・磧砂版・普寧寺版・春日版は六十巻とする。

普濟寺版は、思溪版・春日版と同じく、本経を全六十巻に分巻する³⁾。

二、巻頭の品名・訳者名

経本文の比較に先立ち、各巻巻頭の品名と訳者名とについて、思溪版・春日

版・普濟寺版を比較した。その結果、『摩訶般若波羅蜜經』『大乘大方等日藏經』『大乘大方等月藏經』『大方等大集經』における品名および訳者名は、思溪版・春日版・普濟寺版とも全同であった³⁾。しかし、『大方広華嚴經』における品名・訳者名は、三者に異同が見られた。

| 1. 品名 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|-------|-----------------------|-----------------|-------------|
| 卷第一 | 世間淨眼品第一 (ナシ) | (同上) | (同上) |
| 卷第二 | (ナシ) | 世間淨眼品下 (同上) | (同上) |
| 卷第三 | 盧舍那佛品第二 (ナシ) | (同上) | (同上) |
| 卷第四 | 四諦品第四 (ナシ) | 盧舍那佛品第二下 (同上) | (同上) |
| 卷第五 | 菩薩明難品第六 (ナシ) | (同上) | (同上) |
| 卷第六 | (ナシ) | 賢首菩薩品第八下 (同上) | (同上) |
| 卷第七 | 佛昇夜摩天宮自在品第十五 (ナシ) | (同上) | (同上) |
| 卷第十二 | 大方広華嚴經菩薩十無盡藏品第十八 (ナシ) | 十行品之下 (同上) | (同上) |
| 卷第十三 | 金剛幢菩薩廻向品第二十一 | 如来昇兜率天宮品之二 (同上) | (同上) |
| 卷第十四 | 廻向品之六 | 金剛幢菩薩廻向品第二十一之一 | (同上) |
| 卷第二十一 | 十廻向品 | 廻向品之七 | (同上) |
| 卷第二十二 | 十地品第二十一 | 十廻向品之八 | (同上) |
| 卷第二十三 | 十地品第二十二 | 十廻向品第二十一之九 | (同上) |
| 卷第二十四 | 十地品第二十二之三 | 十地品第二十二之二 | (同上) |
| 卷第二十五 | 十地品第二十二之三 | 十地品第二十二之三 | (同上) |
| 卷第二十六 | 十地品第二十二之三 | 十地品第二十二之三 | (同上) |
| 卷第二十八 | 十地品之四 第十地 | 十地品之四 | (同上) |
| 卷第二十九 | 十明品第二十三 | (同上) | (同上) |
| 卷第三十 | 十忍品第二十四 | 十忍品第二十四之二 | (同上) |
| 卷第三十七 | 寶王如來性起品之三 | 寶王如來性起品之四 (同上) | (同上) |
| 卷第三十八 | 離世間品第三十三之二 | 離世間品之三 | (同上) |
| 卷第三十九 | 離世間品二 | 離世間品之三 | 離世間品 |
| 卷第四十 | 離世間品之三 | 離世間品之四 | 第三十三之三 (同上) |

| | 2. 訳者名 | | |
|-------|-------------|-----------|------|
| 卷第四十五 | 入法界品第三十四之一 | (同上) | (同上) |
| 卷第五十六 | 入法界品之十一 | 入法界品之十二 | (同上) |
| 卷第五十七 | 入法界品之十一 | 入法界品之十三 | (同上) |
| 卷第五十八 | 入法界品之十二 | 入法界品之十四 | (同上) |
| 卷第五十九 | 入法界品之十三 | 入法界品之十五 | (同上) |
| 卷第六十 | 入法界品之十四 | 入法界品之十六 | (同上) |
| 卷第一 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
| 卷第二 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第三 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第四 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第五 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | 天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) |
| 卷第六 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第七 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | 天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) |
| 卷第十二 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第十三 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第十四 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | 天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) |
| 卷第十五 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十一 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十二 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十三 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十四 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十五 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十六 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十八 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第二十九 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第三十 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第三十七 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第三十八 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第三十九 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第四十 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第四十五 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第五十六 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |
| 卷第五十七 | 東晉天竺三藏佛陀羅等譯 | (同上) | (同上) |

卷第五十八 東晉天竺佛陀跋陀羅譯 (同上)
 卷第五十九 東晉天竺佛陀跋陀羅譯 (同上)
 卷第六十 東晉天竺佛陀跋陀羅譯 (同上)

右のとおり、思溪版と春日版との巻頭品名に相違が見られる場合、普濟寺版は原則として、春日版と一致する。訳者名の記載法は、春日版と全て一致した。ただし、卷第三十九の普濟寺版品名「離世間品第三十三之三」は、思溪版とも春日版とも異なる。これが何に依るものか、あるいは独自のものか、現時点では不明である。³⁾

以上、普濟寺版巻頭の品名・訳者名は、春日版と多く一致する。しかし、完全な一致ではない。

三、経本文の異同

本節では、思溪版・春日版・普濟寺版三者の経本文を比較する。前節において、巻頭の品名が異なることを確認した『大方広仏華嚴經』においても、思溪版・春日版・普濟寺版の経文分巻箇所が等しいことは、「一、分巻法」で確認した。

たとえば、三者いずれも品名が異なる『大方広仏華嚴經』卷第三十九にある。巻頭経文は、「佛子菩薩摩訶薩有十種明何等爲十所謂／出生知一切衆生」(大藏經テキストデータ T0278_09-0639-01) / は改行を示す。以下同) から始まる。この一文は、大正新脩大藏經が底本とする高麗再雕版では、卷第三十八の第三張七行目に相当する。

まず、この『大方広仏華嚴經』卷第三十九の本文を、思溪版・春日版・普濟寺版について比較した。その結果、三本に異同が見られたのは、次の箇所であった。普濟寺版本文は、公開画像でご確認願いたい。思溪版・春日版の画像公開が俟たれる。

1. 『大方広仏華嚴經』卷第三十九における比較

| 大正藏所在 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|------------|-------|-------|------|
| ① 0640a05: | 永斷 | (同上) | 永斷 |
| ② 0640a07: | 須彌山王心 | 須彌山王心 | (同上) |
| ③ 0640a20: | 則能普爲而 | 則能普爲 | (同上) |
| ④ 0640b16: | 十行宮殿 | 令行宮殿 | (同上) |

| | | | |
|-----------|------------|----------|------|
| ⑤0640b26: | 有十種樂 | 十種樂 | (同上) |
| 0640c19: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0640c23: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0641a03: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0642c16: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0642c18: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0643a12: | 不驚[欠筆] 不怖 | 不驚不怖 | (同上) |
| 0643b02: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| ⑥0643b19: | 離世間品第三十三之三 | (思溪版に同じ) | (同上) |
| ⑦0643c24: | 一切劫 | 一切劫 | (同上) |
| ⑧0644a03: | 降魔宮屬 | 降魔宮屬 | (同上) |
| 0644a09: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0644a14: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0644a19: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0644a19: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| 0644a25: | 恭敬[欠筆] 供養 | 恭敬供養 | (同上) |
| ⑨0644b04: | 不可說 | 不可說 | (同上) |

春日版の大方広仏華嚴経は、思溪版を参照しているものの、思溪版と小異がある。

普濟寺版は、字形・字詰め・字面高の段差・行の歪み等が、思溪版ではなく、春日版に近い。

②～⑤⑨から、普濟寺版は、春日版に做ったことが知られる。思溪版の欠筆を引き継がない点も、普濟寺版は春日版と等しい。

ただし、前稿で柱刻等の書式について触れたとおり、普濟寺版は、春日版の完全複製では無い。

⑥は、春日版が省略した品名を普濟寺版が補った例である。普濟寺版は、本巻巻頭(一・品名、参照)と巻中とに、同じ「離世間品第三十三之三」を彫っている。

⑦では、思溪版・春日版の異体字「劫」を採用せず、普濟寺版は、「正字体」に改めている。漢字字体については、後に改めて取り上げる。

⑧は、普濟寺版の誤刻であろう。

2. 『大方広仏華嚴経』巻第七における比較

画像公開されている普濟寺版の巻中、巻第七についても、三者の比較結果を

示す。
思溪版は、内題「大方広仏華嚴経巻第七」の下に千字文「坐」と刻工名「潘氏」とを彫り、次行下に「東晋天竺三蔵佛陀羅等譯」として、改行の上、本文を開始する。

一方、春日版は、内題・千字文の下に刻工名を彫らず、次行は、「賢首菩薩品第八下 天竺三蔵佛陀羅等譯」である。

普濟寺版は、内題の下に千字文が見られないものの、次行は春日版と等しい。経本文には、左の異同が存した。

| 大正蔵所在 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|-----------|---------|----------|----------|
| ①0435a05: | 散華莊嚴淨光明 | 散華莊嚴淨光明是 | (思溪版に同じ) |
| ②0435b11: | 自在勝三昧力 | 自在勝三昧力 | (思溪版に同じ) |
| ③0437a09: | 正住甚深諸三昧 | 正住甚深諸三昧 | (思溪版に同じ) |
| 0437b03: | 令瞻敬[欠筆] | (同上) | 令瞻敬 |
| ④0437b29: | 以幢幡蓋而嚴飾 | 以幢幡蓋而嚴飾 | (同上) |
| ⑤0437c03: | 幢蓋幡帳供諸佛 | 幢蓋幡帳供諸佛 | (同上) |
| 0438a21: | 恭敬[欠筆] | (同上) | 恭敬 |
| 0438b01: | 恭敬[欠筆] | (同上) | 恭敬 |
| 0438b28: | 恭敬[欠筆] | (同上) | 恭敬 |
| 0438c01: | 恭敬[欠筆] | (同上) | 恭敬 |
| ⑥0439c04: | 彼化作頭三十二 | 彼化作頭三十三 | (同上) |
| ⑦0439c08: | 竝奏微妙音 | 普奏微妙音 | (同上) |
| ⑧0440c13: | 瞻蔔華 | (同上) | 瞻蔔華 |
| ⑨0441a17: | 修行 | 修行[中央に、] | (同上) |
| 0441a26: | 恭敬[欠筆] | (同上) | 恭敬 |

①②③は、普濟寺版が、春日版の字体を訂正したものであろう。

④～⑦⑨の普濟寺版本文は、春日版と一致する。

⑧の普濟寺版字体「舊」は、日本古写経・聖語蔵本神護景雲二年御願経1088『大方広仏華嚴経』巻第八および高麗再雕版の当該箇所字体と一致する。普濟寺版は、日本古写経本文の字体を採用したものかもしれない。

なお、本巻でも、春日版が思溪版から引き継いでいる「敬」の欠筆を、普濟寺版はまったく継承しない。

3. 『大方広仏華嚴経』巻第六における比較

欠筆と誤刻の実態を追加するため、同経巻第六の本文比較結果の報告も加え

る。当巻の普濟寺版は、大東急記念文庫蔵本であり、画像未公開である。

| 大正蔵所在 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|------------|----------|-------|----------|
| ① 0429a09: | 譬如盲聾人 | 譬如盲聾人 | (思溪版に同じ) |
| ② 0429b09: | 安隱諸菩薩 | (同上) | 安隱諸菩薩 |
| ③ 0429b11: | 安隱諸菩薩 | (同上) | 安隱諸菩薩 |
| ④ 0431a27: | 左右便利 | 五右便利 | (思溪版に同じ) |
| ⑤ 0431b24: | 一切敬〔欠筆〕禮 | (同上) | 一切敬禮 |
| ⑥ 0431c14: | 永除憂惱 | 永除憂惱 | (思溪版に同じ) |
| ⑦ 0431c27: | 歡喜恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 歡喜恭敬 |
| ⑧ 0432a17: | 永離愛欲 | 水離愛欲 | (思溪版に同じ) |
| ⑨ 0432c02: | 受天人敬〔欠筆〕 | (同上) | 受天人敬 |
| ⑩ 0432c02: | 敬〔欠筆〕心觀塔 | (同上) | 敬心觀塔 |
| ⑪ 0432c08: | 讚誦如來 | 讚誦如來 | (思溪版に同じ) |
| ⑫ 0432c13: | 信敬〔欠筆〕 | (同上) | 信敬 |
| ⑬ 0433a13: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑭ 0433a22: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑮ 0433a23: | 信敬〔欠筆〕 | (同上) | 信敬 |
| ⑯ 0433a28: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑰ 0433b11: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑱ 0433b15: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑲ 0433b19: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |
| ⑳ 0434c07: | 恭敬〔欠筆〕 | (同上) | 恭敬 |

①④～⑦は、普濟寺版が春日版の誤刻を採用しない例である。

また、②③は、この両箇所に対応する東禪寺版・開元寺版(ともに全五十巻の巻第五)も、思溪版・春日版と同じ、「安隱」である。

この点について、日本古写経・聖語藏本神護景雲二年御願経を見ると、1033『大方広仏華嚴経』巻第六の該当箇所は、「安隱」と「安樂」と写されている。これは、『大正新修大蔵経』の底本である高麗再雕版の本文と同一であり、古い本文なのであろう。

よって、現時点では、普濟寺版本文「安隱」の拠り所は、不明である。あるいは、独自の修正を加えたものかもしれない。

本巻では、思溪版「敬」の欠筆を春日版が踏襲する。

しかし、普濟寺版は、それらの欠筆を一切採らない。

4・経本文比較のまとめ

他巻・他経における三本の経本文比較も、右と類似の結果であった。そのた

め、それらの対照結果の掲出は、省略する。

なお、普濟寺版にもごく希に、「敬」の終画を欠いた例が存する。たとえば、『摩訶般若波羅蜜経』巻第九の「供養恭敬〔欠筆〕」(大正蔵0280c13)・同巻第十の「供養恭敬〔欠筆〕」(大正蔵0283c14)である。

ただし、この両巻でも、思溪版・春日版が欠筆とする「敬」の他例(巻第九・大正蔵0280c01・0280c02等全五例、巻第十・大正蔵0283b28・0283c10等全三十一例)は、普濟寺版当該箇所では最終画を補っている。右、普濟寺版の欠筆二例は、その補刻ができていない例である、と解釈される。

以上を要するに、普濟寺版の経本文は、春日版に近い。

しかし、普濟寺版は、春日版の誤りを訂し、宋版の欠筆は原則として行なわない。

四、積音本文の異同

東禪寺版・開元寺版では、一函ごとに一帖の積音帖が付される。各帖末に当該帖の積音が彫られるのは思溪版以降であり、春日版は思溪版に倣った。普濟寺版の積音も、思溪版・春日版同様、各帖末に記される。

本節では、普濟寺版の各巻末積音を、思溪版・春日版と比較する。

普濟寺版現存経のうち、『大方広仏華嚴経』には帖末積音が無い。これは、思溪版・春日版にも『大方広仏華嚴経』には帖末積音が存しないため、と考えられる。

『摩訶般若波羅蜜経』『大方等大集経』『日蔵経』『月蔵経』における普濟寺版帖末積音の有無は、思溪版・春日版とほぼ一致する。

ただし、『摩訶般若波羅蜜経』巻第十四・十五・十七、『大方等大集月蔵経』巻第四の諸巻は、思溪版・春日版に帖末積音が存しながら、普濟寺版にはそれが見られない。

右四巻は、普濟寺版が帖末積音の彫刻を省略したものであろう。

また、『大方等大集月蔵経』巻第三は、思溪版には十一行におよぶ積音が存するものの、春日版に積音は無く、普濟寺版にも積音は彫刻されていない。とはいえ、普濟寺版が思溪版に存する積音を彫刻しない例はこの『大方等大集月蔵経』巻第三ばかりではないのであるから、この一例をもって、普濟寺版の積音が春日版に基づくとすることはできない。

普濟寺版の積音が思溪版と春日版とのいずれに基づくものかは、積音本文の比較によって初めて明らかになる。

本稿の筆者は、東禪寺版・開元寺版・思溪版と春日版の積音本文を比較し、その結果を公表したことがある。この、かつての検討で、春日版の積音は、東禪寺版・開元寺版より思溪版に近いものの、思溪版とも小差が有ることが判明している。

1. 『摩訶般若波羅蜜經』積音における比較

左に、『摩訶般若波羅蜜經』思溪版・春日版・普濟寺版三者の積音本文比較から見出された異同の一部を掲げる。ただし、巻第一〜九・十二には、思溪版・春日版・普濟寺版のいずれにも帖末積音が無く、先に記したとおり、思溪版・春日版巻第十四・十五・十七に存する積音が普濟寺版には見られない。なお、積音は大正蔵では翻刻されていないため、当該例の所在は、巻次と積音行数とで示す（〜）内は割書であることを示す。以下同じ。

| 所在巻積音行 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|--------|-------------|-------------|-----------|
| ①十一 | 問訕 | 問訕 | 同上 |
| ②十二 | 斯匿(略) 此云(略) | 斯匿(略) 此云(略) | 同上 |
| ③十二 | 斯匿(下尼刀反(略)) | 斯匿(下尼刀反(略)) | 同上 |
| ④十三 | 膽力(一丁敢反) | 同上 | 膽力(上丁敢反) |
| ⑤十一 | 螿(略) 蠶人也 | 同上 | 螿(略) 刺人也 |
| ⑥十一 | 噎(一訕反(略)) | 同上 | 噎(一結反(略)) |
| ⑦十一 | 瞢(略) 莫庚反 | 同上 | 瞢(略) 莫庚切 |
| ⑧十一 | 縹(略) 又作票 | 同上 | 縹(略) 又作縹 |
| ⑨十一 | 篋(告怙反(略)) | 同上 | 篋(語叶切(略)) |
| ⑩十一 | 翅(音施去) 翼也 | 翅(音施去) 翼也 | 同上 |
| ⑪十二 | 潛伏(上昨端反(略)) | 潛伏(上昨端反(略)) | 同上 |

普濟寺版には、春日版の誤刻・脱落を引き継いだ例①②③⑩⑪が有る。しかし、④⑤⑥⑧は、思溪版・春日版の誤りを訂している、と解される。また、⑦では反切の「反」を普濟寺版は「切」とし、⑨では思溪版・春日版と別反切を引用している。

これら④〜⑨は、思溪版を参照するのみでは修正困難と判断される。右のごとく、本経普濟寺版積音は、春日版に基づくと考えられるものの、思溪版その他の参考文献を参照し、春日版の誤りを修正している。

なお、本経巻第二十七積音の行取りは、思溪版と春日版とは完全に一致し、普濟寺版は両者と異なる。これも、普濟寺版独自の点である。

2. 『大方等大集經』積音における比較

『大方等大集經』の積音比較結果も、同様に掲げる。

| 所在巻積音行 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|--------|--------------|--------------|------------|
| ①一 | 矇咳(上(略) 正作矇) | 矇咳(上(略) 正作矇) | 同上 |
| ②三 | 手矇(下亦作劔昌戀反) | 手劔(下昌戀反) | 同上 |
| ③八 | 嬌濡(上音透/側也) | 嬌濡(上音透/側也) | 同上 |
| ④八 | 柔濡(下正/作軟) | 柔濡(下正/側也) | 柔濡(欠)/欠 |
| ⑤九 | 羸(力垂反) | 羸(力乘反) | 羸(力垂反) |
| ⑥九 | 陶師(上音桃(略)) | 陶師(上音桃(略)) | 陶師(上音桃(略)) |
| ⑦十一 | 鎧(略) 甲也 | 鎧(略) 田也 | 同上 |
| ⑧十一 | 祁(渠又/反) | 祁(柰又/反) | 同上 |
| ⑨十二 | 倚(音倚) | 倚(音倚) | 同上 |
| ⑩十三 | 翹動(上渠/擗反) | 翹動(上渠/擗反) | 同上 |

右①③⑤⑥⑧⑨⑩は、春日版の誤刻である。

このうち、①③⑤⑥⑧⑨⑩は、普濟寺版は、春日版の誤刻にそのまま従っている。⑧の思溪版反切下字「又」は、「支」の上部が欠けた例である。東禪寺版は「祁(渠支反)」で、これが中古音に合う。春日版は、思溪版反切下字を踏襲し、反切下字も別字にした。普濟寺版は、その春日版と全同である。

⑨⑩も、春日版の音注では、別音となる。普濟寺版は、その春日版に従う。②は、春日版が本文字体を変えたため、思溪版の字体注を削除している。普濟寺版は、その春日版と等しい。

④では、春日版の板木が欠損していたものか、割書二字のみの最終行が印刷されていない。普濟寺版も「作軟」相当部分に文字が無く、その上の「下正」も印字されていない。⑦も、④の類例である。春日版は「甲」の最終画下が印刷されておらず、「田」に見える。これに倣った普濟寺版は、「田」に彫っている。ただし、⑤⑥では、普濟寺版は、春日版の誤りを訂し、思溪版と同じ音注を採る。

3. 『日藏經』『月藏經』積音における比較

『日藏經』『月藏經』からは、春日版の誤りを普濟寺版が修正した例を、抜粋する。

| 所在 | 卷積音行 | 思溪版 | 春日版 | 普濟寺版 |
|----|--------------|-----------|-------------|----------|
| ① | 日藏・二 8 俵 | | 俵 | (思溪版に同じ) |
| ② | 日藏・二 9 珊 | (蘇干反) | 珊(蘇二反) | (思溪版に同じ) |
| ③ | 日藏・二 15 (前文) | | (前文) | (思溪版に同じ) |
| ④ | 日藏・二 15 (後文) | | (後文) | (思溪版に同じ) |
| ⑤ | 日藏・三 2 嵐 | (郎含反) | 嵐(郎含反) | (思溪版に同じ) |
| ⑥ | 日藏・五 4 筐盛 | (略) 下音成 | 筐盛(略) 市音成 | (思溪版に同じ) |
| ⑦ | 月藏・一 8 羈提 | (上初膺初眼二反) | 羈提(上初膺初眼一反) | (思溪版に同じ) |
| ⑧ | 月藏・五 4 淋水 | | 淋水 | (思溪版に同じ) |

右例以外に、普濟寺版が春日版の誤りをそのまま引き継ぐ例が本経にも存するため、本経普濟寺版の積音も、思溪版積音に直接依拠したものではないことが知られる。

4. 積音本文比較のまとめ

以上、普濟寺版の積音は、春日版に基づくものの、その誤りを修正した箇所が有る。ここまでの検討結果から、その修正には思溪版を参照したと考えるのが、最も自然である。

また、普濟寺版には、積音においても、思溪版とも春日版とも異なる点があった。よって、普濟寺版積音における依拠資料は、春日版・普濟寺版ばかりではな

かった、と考えられる。

五、漢字字体の異同

これまでの検討においても、漢字の字体について触れてきた。

ここでは、既述以外の漢字字体の異同について、若干例を記す。

問題とする字体・字形は、活字表示不可能であるため、普濟寺版の画像が公開されている『大方広華嚴經』巻第七の例を挙げる。実際の字体・字形は、公開画像をご覧頂きたい。なお、思溪版を加えると二行となるため、春日版のみとの異同を示す。

所在は、当該巻における初出例の所在である。ただし、それ以降も同一字体・字形であるとは限らない。加えて、他巻・他経では、字体・字形は相違を見せる。

| 所在 | 春日版 | 普濟寺版 |
|-----------|---------------|------------------|
| ①0436a07: | 逸 | 「逸」の「兔」最終画の上に「ム」 |
| ②0437b06: | 聽 | 「聽」の「王」を「土」に作る |
| ③0439a27: | 業の異体字 | 業 |
| ④0439c20: | 「恐」の「凡」の「一」無し | 恐 |
| ⑤0440a21: | 「網」の「罔」内を「又」 | 網 |
| ⑥0440b05: | 氣の「米」を「木」に作る | 氣 |

右のごとく、春日版・普濟寺版それぞれに、いわゆる俗字体・通字体・略字体を使用している。

「一」を欠く字体は、板木の「一」が欠けている可能性を完全には否定できないものの、同一字体が複数回出現するため、意図的なものであろうと判断される。なお、普濟寺版にも、「縛」の「一」を打たない字体(0439c03など)が見られる。

また、普濟寺版は、春日版が「示」とする示偏を、「ネ」に作ることが多い。

思溪版当該箇所字体は、①④は春日版字体と一致し、⑤⑥は普濟寺版字体と一致する。

したがって、普濟寺版は、①④は、思溪版とも春日版とも異なる。

このように、字体・字形についても、普濟寺版は思溪版あるいは春日版に完全に依拠したものではない。

六、むすび

以上、本稿では、「普濟寺版「五部大乘經」は「覆宋版」か」との問いを立て、巻頭の品名・訳者名、経本文、積音本文、および漢字字体の異同について、検討してきた。

その検討結果を前稿同様に分類すれば、次のとおりとなる。

- ① 普濟寺版が春日版と一致し、思溪版と一致しない項目
- 巻頭の品名、訳者名、経本文の大部分、積音本文の大部分、漢字字体の一部。
- ② 普濟寺版が思溪版と一致し、春日版と一致しない項目
- 経本文の一部、積音本文の一部、漢字字体の一部。
- ③ 普濟寺版が思溪版・春日版のいずれとも一致しない項目

巻頭の品名の一部、経本文の一部、欠筆「敬」の大部分、漢字字体の一部。本稿の検討結果も、前稿と一致する。

すなわち、普濟寺版は、宋版と春日版とは、春日版に近い。したがって、「普濟寺版」「五部大乘経」は「覆宋版」かという問いへの回答は、さにあらず、ということになる。

しかし、前稿に引用した先行研究の一説のように、「和刻の覆宋版」「五部大乘経」を底本にして、刊行した」とも言えない。春日版と一致しない項目②③も、少なからず存するからである。

よって、本稿の検討においても、普濟寺版は、貞治年間に、日本武州において新たな「五部大乘経」を開版しようとしたものである、との前稿と同じ結論に至る。

これこそが、数多の民衆の勸進を集める力となった普濟寺版「五部大乘経」の開版目的であった、と考えられる。

【注】

(1) 前稿刊行からの本稿公表の間に、京都大学附属図書館蔵普濟寺版大方広仏華嚴経全巻の精細画像を、京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開して頂いた。本紙面を借りて、謝意を表したい。

(2) なお、思溪版は、この旧訳華嚴経を一函一帙に十二巻を収める。それによつて、一函に十巻を所収する東禪寺版・開元寺版と同じく、千字文105坐―109垂に収まっている。したがって、旧訳華嚴経第一函は、巻第一―第十二までに千字文105坐が振られることとなる。東禪寺版・開元寺版の「華嚴経」巻第十一・十二は、106朝に分属されている。春日版五部大乘経旧訳「華嚴経」は、思溪版同様、十二巻ごとに千字文を割り振っている。

前稿に記した如く、少数見られる普濟寺版の千字文も、思溪版・春日版と一致する。

(3) 本稿の筆者は、『摩訶般若波羅蜜経』巻第六・七・十五・二十二・二十四は、宋版一切経内で、東禪寺版・開元寺版・思溪版で品名が異なり、春日版は思溪版と一致することを具体例を挙げて示した(佐々木 勇「春日版」「五部大乘経」の底本とされた宋版一切経(二)―本文の比較による検討―)(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』65号、二〇一六

年十二月)。普濟寺版『摩訶般若波羅蜜経』は、その思溪版・春日版の品名と完全に一致する。次のとおりである。

品名―巻第一「序品第一」、巻第二「往生品第四」、巻第三「勸學品第八」、巻第四「幻人品第十一」、巻第五「莊嚴品第十七」、巻第六「摩訶般若波羅蜜経廣乘品第十九」、巻第七「勝出品第二十二」、巻第八「十無品第二十五」、巻第九「幻聽品第二十八」、巻第十「寶塔大明品第三十二」、巻第十一「舍利品第三十七」、巻第十二「十善品第三十八之餘」、巻第十三「隨喜品第三十九之餘」、巻第十四「歎淨品第四十二」、巻第十五「經耳聞持品第四十五」、巻第十六「兩不和合過品第四十七」、巻第十七「大事起成瓣品第五十」、巻第十八「大如品第五十四」、巻第十九「轉不轉品第五十六」、巻第二十「恒伽提婆品第五十九」。

訳者名―巻第一―二十「姚秦三藏法師鳩摩羅什共僧叡譯」。

「大方等大集経」以下も、同様に掲げる。

品名―巻第一「序品第一」、巻第二「陀羅尼自在王菩薩品第二之二」、巻第三「陀羅尼自在王菩薩品第二之三」、巻第四「陀羅尼自在王菩薩品第二之四」、巻第五「寶女品第三之一」、巻第六「寶女品第三之二」、巻第七「不胸菩薩品第三」、巻第八「海慧菩薩品第四之一」、巻第九「海慧菩薩品第五之二」、巻第十「海慧菩薩品第四」、巻第十一「海慧菩薩品第五之四」、巻第十二「虚空藏所問品第五之一」、巻第十三「虚空藏菩薩品第六之二」、巻第十六「虚空藏菩薩品之五」、巻第二十一「寶幢分中相品第五」、巻第二十二「寶幢分中護品第七」、巻第二十三「虚空目分第九ノ聲聞品第一」、巻第二十四「虚空目分第九ノ世間目品第二」、巻第二十五「虚空目分第九ノ聖目品第六」、巻第二十六「寶髻菩薩品第十一」、巻第二十七「寶髻菩薩品第十一」、巻第二十八「日密集初護法品第一」、巻第二十九「陀羅尼品第二之餘」、巻第三十「分別品第四之餘」。

訳者名―巻第一―二十二「北凉天竺三藏曇無讖於姑臧譯」、巻第二十三「北凉天竺曇無讖譯」、巻第二十四―三十「北凉天竺三藏曇無讖譯」。

「大乘大方等日藏経」

品名―巻第一「護持正法品第一」、巻第二「陀羅尼品第二」、巻第三「陀羅尼品下」、巻第四「菩薩使品第三」、巻第五「定品第四」、巻第六「惡業集品第五」、巻第七「佛現神通品第七」、巻第八「魔王波旬星宿品第八之二」、巻第九「送使品第九」、巻第十「三歸濟龍品下」。

訳者名―巻第一―十「隋天竺三藏那連提耶舍譯」。

『大方等大集月藏經』

品名「卷第一「月幢神呪品第一」、卷第二「魔王波旬詣佛所品第二」、卷第三「本事品第四」、卷第四「令魔得信樂品第六」、卷第五「諸惡鬼神得敬信品第八上」、卷第六「諸惡鬼神得敬信品第八下」、卷第七「諸魔得敬信品第十」、卷第八「忍辱品第十六」、卷第九「分布閻浮提品第十七」、卷第十「星宿攝受品第十八」。

訳者名「卷第一〜十「高齊天竺三藏那連提耶舍譯」。

(4) 金剛寺藏書写一切經は、思溪版と同じ、「離世間品第三」とする。国際仏教学大学院大学「日本古写經データベース」、参照。

(5) 佐々木勇「春日版「五部大乘經」の底本とされた宋版一切經(二) ―刻記の比較による検討―」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 文化教育開発関連領域)64号、二〇一五年十二月、注(3) 佐々木(二〇一六)、同「春日版「五部大乘經」の底本とされた宋版一切經(三) ―釈音の比較による検討と宋版との相違点―」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 文化教育開発関連領域)66号、二〇一七年十二月)、参照。春日版の摩訶般若波羅蜜經・大方等大集經・大乘大方等日藏經・大方等大集月藏經も、思溪版に基づく。

(6) 右注の佐々木(二〇一七)。

Was Original Text of Fusaiji Edition (普濟寺版)
the Five Volumes of
Mahayana Sutras (五部大乘經) Printed Based
on the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon (宋版一切經)? (2)
— Comparing text and kanji glyphs —

Isamu Sasaki

Abstract : The Five Mahayana Sutras (Hoke-kyo (法華經), Kegon-kyo (華嚴經), Nehan-kyo (涅槃經), Daijik-kyo (大集經), Daibon hannya-kyo (大品般若經)) were printed at Musashi country in Nanbokucho period. Those were called Fusai-ji edition (普濟寺版).

The purpose of this paper is to check whether Fusai-ji edition is based on South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon.

The next was understood by consideration of this thesis.

1. The Fusai-ji edition is not directly based on the South Song dynasty edition.
2. The main source of the Fusai-ji edition is the Kasuga edition.
3. The Fusai-ji edition has its own items.

This paper revealed that the Fusai-ji edition (普濟寺版) was an attempt to print a new The Five Mahayana Sutras. This purpose of publishing the Fusai-ji edition became the force that attracted donations from many people.

Key words: the text of Fusaiji edition, the South song dynasty edition of the buddhist canon,
the text of Kasuga edition, the five volumes of Mahayana Sutras

キーワード : 普濟寺版, 宋版一切經, 春日版, 五部大乘經